



「グローバル通信第2号」で、この夏にインターンシップで日本にやってくるハーバード大学の学生を受け入れて下さるご家庭を募集したところ、14のご家庭からお申し出をいただきました。依頼主であるISAの方で、宿泊地と仕事場との距離などを勘案し、2軒のお宅にお願いすることになりました。

1週間ほどの短い期間ではありましたが、その間のご感想をお寄せいただきました。なお、匿名の形で掲載させていただきます。

海外留学生のホームステイを受け入れて 中学1年生保護者A

このたびISAの「ハーバード生のホームステイ」の依頼を受け、一週間の短い期間ではありますが、ご協力をさせていただきました。

我々自身、ホームステイを行ったことも引き受けたこともなく、ホームステイというものがまさしく初めての経験でしたので、他と比較することはできませんが我が家にとって大変に得難いものとなりました。

ホームステイで受け入れた学生は、ハーバード大学1年のDionという学生です。体はとても大きいのですが、笑顔にあどけなさの残るいい青年です。日本の文化に関心を持ち義理人情といった日本人のメンタリティに興味を抱きつつ、他方で日本のアニメが好きでカルピスのおいしさに感動する幼さも併せ持っています。

彼は、日中は品川のISAのインターンに参加しておりましたので、我が家では朝食と夕食をともにしつつ、就寝の時間まで彼の学生生活や日本文化の話題について、英語と日本語でコミュニケーションをとっておりました。当初、子供たち（当校生と3つ上の姉がいます）は、ハーバードという名に気後れしコミュニケーションも碌に取らず数日は距離を置いていましたが、たまたま盛り上がっていたブラジルW杯のTV観戦などを通じ距離が縮まり、Dionが日本語で、子供たちは英語で自己紹介し、互いに添削するなどいい関係を築けるようになっていきました。また、休日にはDionと子供たちで浅草観光やアニメ鑑賞など新旧の日本文化に少し触れてもらう機会を作りました。我々にとって（できのいい）息子ができたような、そんな一週間でした。

そうした今回の受け入れを通じ何よりよかったことは、子供たちに多様な人に触れる機会を作れたことです。我々の田舎は遠方にありなかなか帰郷できません。またご近所の方々との関係も田舎ほど密ではなく、我々が子供の頃に当たり前のようにあった家族や友人以外のコミュニティへの参加がどうしても限られています。常日頃から気を遣わなくてもいい人に囲まれてしまっていることで、自分の事を分かってもらおう努力や、相手のことを気遣う配慮などを怠りがちです。

今回のホームステイにより人種や文化が異なる人と一緒に暮らす、そのなかで共通の話題を探し異なる言語で一生懸命に意思疎通を図る。単一の集合体から多様性を受け入れていく努力や苦勞を学ぶことで、自分の世界が広がっていくような経験を子供たちに与えられたことは非常に有意義でした。

ちなみに、Dionとは帰国後もSkypeやLineを通じ関係を継続しています。子供たちともDionを訪ねにボストンに行く計画を立てたり、自身もホームステイをやってみたいとの希望を抱い

ております。

—地球の裏側に自分の友達がいる—そう感じることできっと世界を身近に感じてくれていると思います。

寿司好きなハーバード大生 高校1年生保護者B

7月13日から8日間、ハーバード大生Dionのホームステイ受け入れをしました。我が家にとって外国人のホームステイ受け入れは初めての経験で、食事の面、言葉の面など少し不安はありましたが、「ありのままの我が家」を体験してもらおうこととし、「Welcome Dion」と書いた紙を手元に最寄り駅まで迎えに行きました。初めて会ったDionは19歳という年齢よりもずっと年上に見えました。大きな体格からのイメージとは違ってシャイでとても緊張しているようでしたが、話してみると、すぐに彼の人の良さがわかりました。あとで聞くと、年齢より上に見られたくて、ひげを伸ばしているのだとか。最初の食卓を囲むと、高1と中2の息子たちともすぐに打ち解けました。

Dionの我が家での生活は朝7時頃家を出て、日中はインターンシップ生としての活動をし、夕食からが私たちと一緒に過ごす時間でした。夕食時の会話のスタートは「今日のランチは何食べたの？」でした。Dionはチャレンジ精神旺盛でいろいろな日本食を食べていました。一般的に外国人は苦手だと聞いていた、焼き魚、刺身、生卵などもおいしいと言って食べていて、そのチャレンジ精神には感心しました。特にお寿司は大好物のようで、「毎日でも大丈夫」というので、二日に1回は夕食に登場することになりました…。

夕食後はDionの片言の日本語と私たちの片言の英語でいろいろな話をしました。ハーバード大生の生活や家族のこと、ガールフレンドのこと、Dionが好きなジブリの世界やワールドカップについてまで辞書を片手に毎晩話しました。この時間は本当に楽しく有意義な時間でした。最初は「全然会話が聞き取れない」と言っていた中学2年の次男も2、3日すると、知っている単語が会話の中で出てくると、それを手がかりに推測しながら会話に積極的に参加するようになっていました。

ハーバード大学で日本語について学んでいるDionは大学で使っているテキストを持参していて、見せてくれました。日本語を学んでわずか1年なのに、敬語や福沢諭吉の教えまでがテキストには載っていてそのレベルの高さには驚きました。そして、何より感心したのは彼の勉強に取り組む姿勢でした。彼のテキストのページには学習する日付がふられていたのですが、自分で予習し、すでに来年の分まで進めていました。新しく覚えた日本語はどんどん会話の中で使ってみたり、日本の習慣や文化なども積極的に吸収しようとしている姿勢はすばらしいものでした。

その一方で、友達と撮ったおもしろい動画を見せてくれながら大笑いしたり、ガールフレンドから送られてきたメールに落ち込んでいる様子などはハーバード大生も同じで、息子たちも彼をより身近に感じたようでした。

最後の夕食もメインはお寿司で、にぎりずしを一緒に作りました。寿司めしをうちわで扇ぐのを手伝ってくれ、にぎった寿司めしの上に自分でネタをのせ、うれしそうに食べていました。この日の夕食は6時頃から始まり、食べて、飲んで、歌って、たくさんおしゃべりをし、気付くと夜中の12時をまわっていました。Dionは歌うのが上手で、「上をむいて歩こう」を日本語で歌い、その歌詞の解釈を語っている姿が心に残っています。

別れの日には旅立つ息子を見送る母の心境で、本当に寂しい気持ちでいっぱいでしたが、最後に「日本語の勉強頑張ってね」と声をかけると、息子たちに「君たちも英語ももっと勉強しろよ!」と言い、笑いながら手を振って去って行きました。年齢も近かったのも、だんご3兄弟のように過ごしていた息子たちとは最後まで軽口をたたき、彼らしい別れでした。

あつという間の8日間でしたが、とても楽しく有意義な時間を過ごし、貴重な経験をする事ができました。

今回、このような素晴らしい機会をいただけたことを大変有難く思っています。

海外への留学生の減少はやや改善傾向にあるようですが、受け入れ、つまりホストファミリーの希望者はなかなか増えないようです。住宅事情等もあるのですが、真の国際交流は決して送り出すだけではありません。「おもてなし」のように、受け入れることにも大きな意味があると思われまます。このような機会がまたありましたらご紹介致します。

アメリカ便り「一学期と予習の意義」

大村 崇寛

皆さん、こんにちは！グリネル大学の大村です（しつこく大学名を明記して覚えていただきます）。8月13日にアメリカに戻り、一ヶ月が経ちました。これまでの一ヶ月を少し振り返りたいと思います。

僕は今年、新入の留学生を対象にしたオリエンテーションのスタッフとして他の人より二週間ほど早くキャンパスに戻りました。このオリエンテーションを、僕の大学ではIPOP (International Pre-Orientation Program) と呼んでいます。留学生はアメリカ人の新生が来る前に大学に慣れておこう、という意図で毎年行われています。僕も去年は新生として、今年は主催者側としてIPOP leader を名乗って参加しました。リーダーは主に集団の束ね役と話し相手を務めます。

去年僕がアメリカに来てすぐの時は、すぐに周りと同調せずわりと無口でした。そんな経験から、僕に似た一年生を手助けできたら、と思いリーダーに立候補しました。厳しい審査（倍率7-8倍！？）を経て晴れてリーダーに選ばれ、IPOPでたくさんの一年生と知り合せて、非常に有意義な体験でした。今でも一年生に会うと挨拶してくれるのが嬉しいです（相手の名前をたまに忘れてしまうのは秘密…）。

さて、IPOPが終わり、一学期がスタートしましたが、去年よりさらに忙しくなりました…今学期は社会心理学、世界大戦史、生物（神経科学）、美術（スタジオ系）を取っています。とにかく課題が容赦なく飛んできます。特に生物が難しいです…最後に生物を取ったのが高校一年生で、さらに神経科学となると、ほぼお手上げです（笑）。グリネルの生物学入門の授業形態は特殊で、様々なトピックが取り上げられており、神経科学はそのうちの一つです。実験ではザリガニを解剖して細胞の膜電位を測定したり、神経をつついて遊んだりしています。

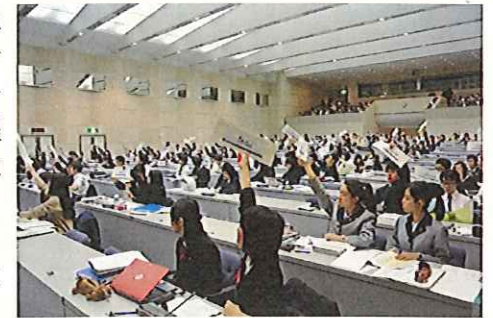
…歴史の宿題をやりながらふと思いました…高校時代と今とで何が一番違うか。勿論論文をたくさん読まされるだとか、論文を書かされるだとか、色々ありますが、それは大学だから当然でしょう。では、僕が思うに何が違うか、それは宿題のあり方です。日本の大学でどうかは知りませんが、こちらでは授業前の読書が最も重要です。要するに「予習」です。アメリカではある程度「予習」＝「宿題」が成り立ちます。授業は、読むべきものの内容を皆が知っているという前提で進むので、その内容についてより深く、詳しく学ぶことができます。歴史では、本を読んで授業に行き、その内容について議論します。宿題（読書）がインプット、授業（議論）がアウトプットです。この授業形態だと勉強したことが頭に残りやすいです。

予習は、大人数で講義がメインの授業でも有意義だと確信しています。予習すれば、授業でもっとその内容について掘り下げて取り上げることができ、アウトプットも、議論という方法以外で練習できます（問題演習など…）。

予習という勉強法が海城により波及することを期待し、今回取り上げました。ちなみに、僕の予習に対する考え方は、社会科・立川先生と意見が合致したので…立川先生、そこのところよろしくお願ひします！

全日本高校模擬国連一次選考通過

高校2年生の「星野・中山」チームが第8回全日本高校模擬国連大会の一次選考を通過しました。グリネル大学に進学した大村君も高校1年生の時に一次選考を通過しました。今年度は校内で3チームの申し込みがあり（高校1・2年生を対象に1チーム2名、各校2チームまで参加可能）、校内選考会を経て2チームが申し込みをしました。1年生のチームは残念ながら敗退しました。次は11月14日、15日に国連大学で開催されます。詳細は、二次選考終了後、出場する「星野・中山」チームに書いてもらうことにします。



〈昨年の会議場風景〉

さて、「高校生模擬国連」とはそもそもどのようなものか。ホームページから抜粋しておきます。

模擬国連は、参加者一人ひとりが国連加盟国の大使になりきって国際会議をシミュレーションし、今日の世界における様々な国際問題を学ぶ活動です。この先進的な教育プログラムは1923年にアメリカのハーバード大学で始まり、日本でも大学生の模擬国連は30年以上の歴史があります。グローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第一回日本代表団の高校模擬国連国際大会への派遣を皮切りに、高校生の模擬国連活動が始まりました。

次に、一次選考の課題の一部を掲載します。

今年度の一次選考課題は、下記の通りとなっております。また、日本語課題は、1組につき1つを、英語課題は、参加者1人につき1つを作成して下さい。

○日本語課題

1954年、日本はコロンボ・プランに加盟して政府開発援助(ODA)を通じた国際協力を開始しました。2014年はその60周年という節目の年に当たります。また今年は11年ぶりに、日本政府のODA政策の方針を定めたODA大綱が見直されることになり、政府内でも改定に向けた議論が活発になっています(2014年7月現在)。このような背景の中、そのあり方が改めて問い直されている日本のODAについて、以下の問いに答えなさい。

問1 外務省の「2013年版 政府開発援助(ODA)白書」の第1部第1章第1節「グローバル経済の中の途上国とODA」(2～5ページ)を読んで、日本のODAに求められる役割の変化とその目的を、国際環境の変化と対応させながら簡潔にまとめなさい。600字以内。

《資料1》

外務省「2013年版 政府開発援助(ODA)白書」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/13_hakusho_pdf/index.html

ところで、高校模擬国連に参加するには、日頃のトレーニングが必要です。語学も勿論ですが、資料の読解、考察、まとめる力が重要です。今、星野君を中心として「中・高グローバル同好会」を立ち上げ、模擬国連への参加は勿論のこと、国際問題に取り組む他校の生徒や留学生と交流をするという活動を考えているようです。関心のある生徒諸君は是非参加して下さい。